



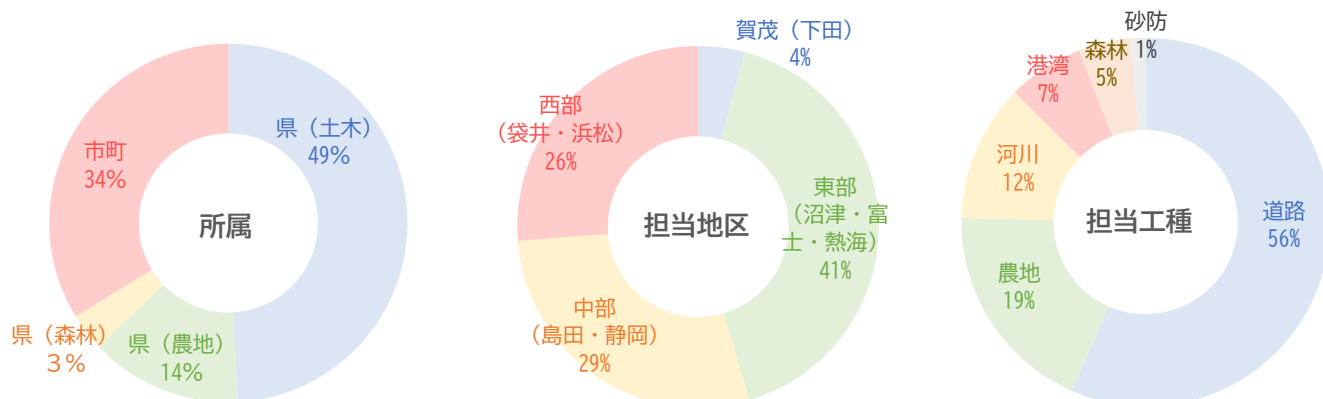
「流用したい、だけど…」に隠された現場のリアル

～発注者の本音から見た、建設リサイクルを阻む「壁」を報告します～

建設発生土の有効活用に関する現状把握を目的として、県および市町の公共事業工事発注者の皆様を対象にアンケート調査を実施しました。ご協力いただいたみなさまありがとうございました！

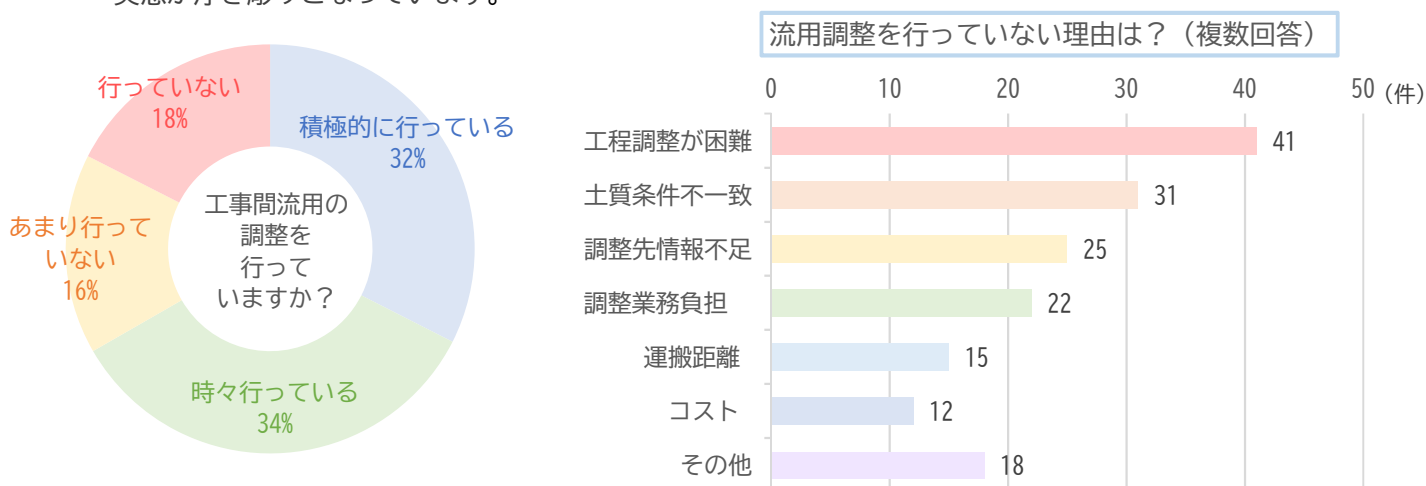
今号では、みなさまからいただいた現場のリアルな声をお伝えします。

県土木、農地、森林及び市町の発注者240名の皆様にご回答いただきました。回答者のみなさまの属性はグラフのとおりです。



「建設発生土の行き先がない！」搬出時の切実な困りごと

「工程の不一致」や「土質条件の相違」が主な障壁となっており、現場レベルでの調整には限界がある実態が浮き彫りとなっています。



工事間流用の調整を行っていない理由

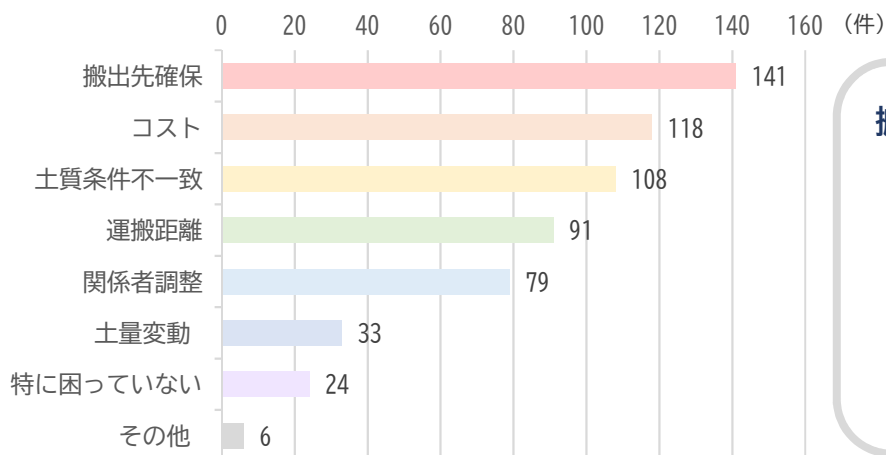
■工事規模の制約

工事規模が小さく、調整を行う余地やメリットがない

■占用工事等の固有事情

ガスや上下水道の占用工事は掘削してすぐに埋め戻す必要があるため、他工事と流用するタイミングがない

搬出先の検討時に困っていること（複数回答）



搬出先の検討時に困っていること

■時期の不一致

土砂が出るタイミング（搬出）と必要とされるタイミング（受入）が合わない

■ストックヤードの不足

一時的に土砂を留めておくための仮置き場やヤードが地域内に全くない

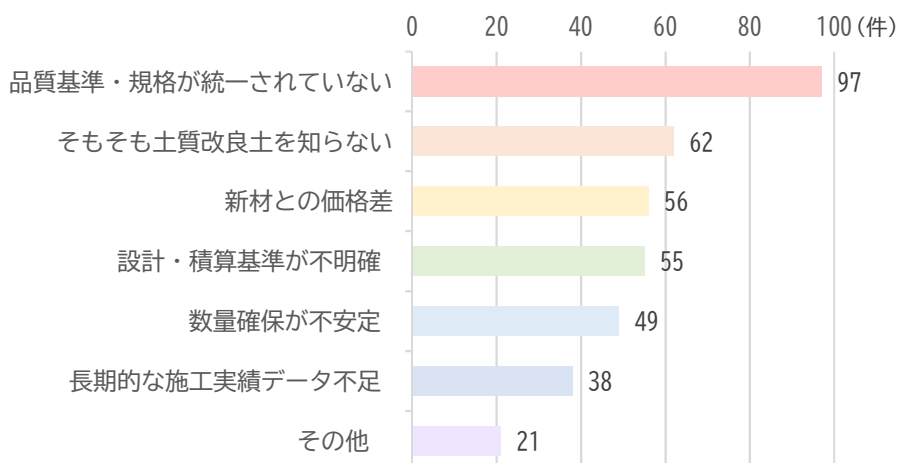
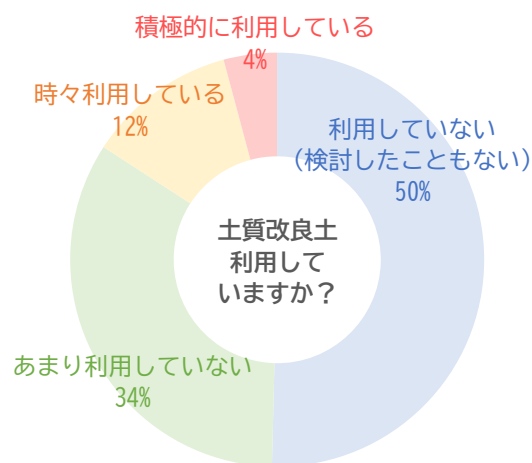


土質改良土の利用経験「なし」が半数超

～品質への不安と道路復旧基準が普及の壁に～

利用経験の乏しさの背景には、品質基準の未整備や硬化後の再掘削の困難さ、周囲への環境影響に対する懸念など、多様な要因が絡み合っています。

土質改良土の利用で課題となることは？（複数回答）



土質改良土の利用で課題となること

■隣接環境への影響懸念

セメントや石灰を用いた改良土の場合、**農業用水や農地（作物）に隣接する箇所で使用すると、アルカリ化や生育不良等の苦情に繋がる懸念がある**

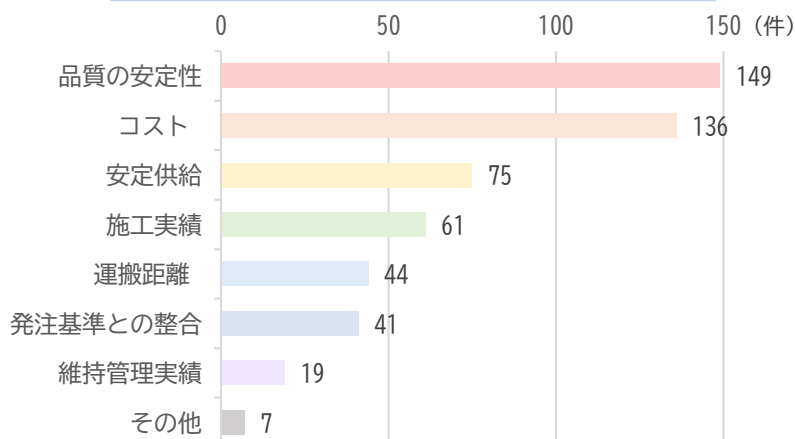
■施工・再掘削の困難さ

一度改良土で埋め戻した箇所が非常に硬く固まってしまい、**将来的に再度掘削する（水道やガスの修繕など）際に作業が著しく困難になる**

■制度・基準の壁

各自治体や警察が定めている**道路復旧基準（埋戻し材としてRC-40等を指定）**において、改良土の使用が認められていない

土質改良土の採用判断で重視すること
(3つまで選択)



土質改良土の採用判断で重視すること

■環境安全性の担保

周辺住民や農家へ自信を持って説明できる、**化学的・水質安全性の数値保証**(pH など)

■積算・歩掛の明確さ

設計単価や規格が積算システムに明瞭に導入・反映されていること

土質改良土の利用拡大に

必要な施策は？

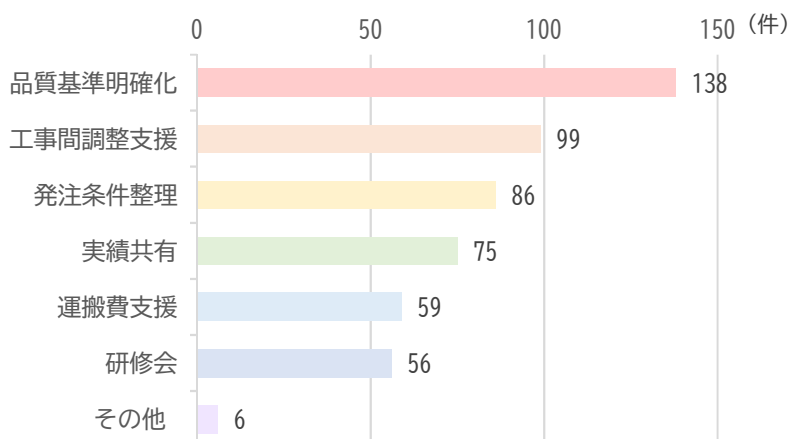
■発注側からの標準化義務付け

設計段階や特記仕様書において、**土質改良土の使用を原則標準とするような強い後押し**

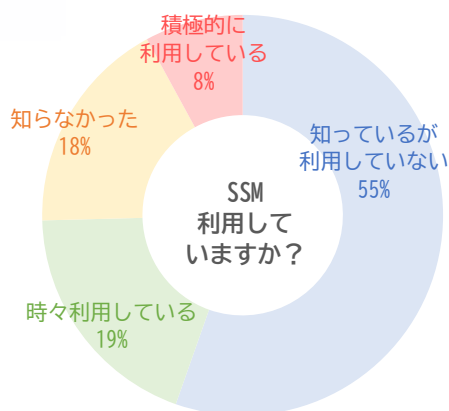
■道路管理者への啓発

県から市町の道路管理担当部署に対し、占用工事での改良土採用の検討を依頼する

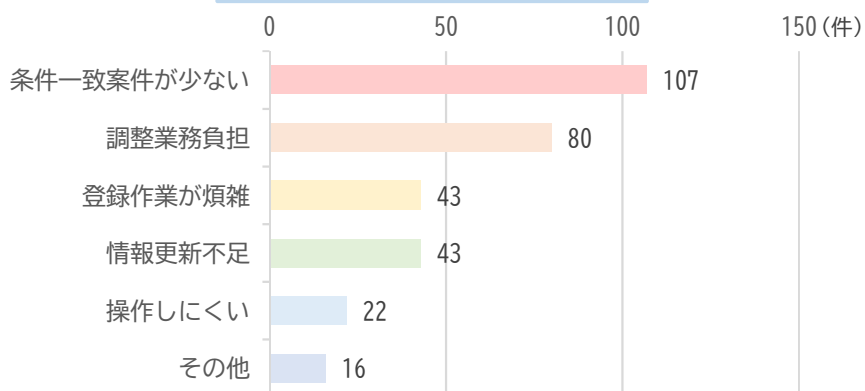
土質改良土の利用拡大に必要な施策は？
(複数回答)



「もっと使いやすく、もっと便利に！」SSM進化への期待と現場の声



SSM利用時の課題は？(複数回答)



SSM利用時の課題

■システム重複による混乱

コブリス(COBRIS)やプリザンダーなど、**他の調整・登録システムとの違いや使い分けが分からず、二重登録の手間だけが増えている**

■アクセスのしにくさ

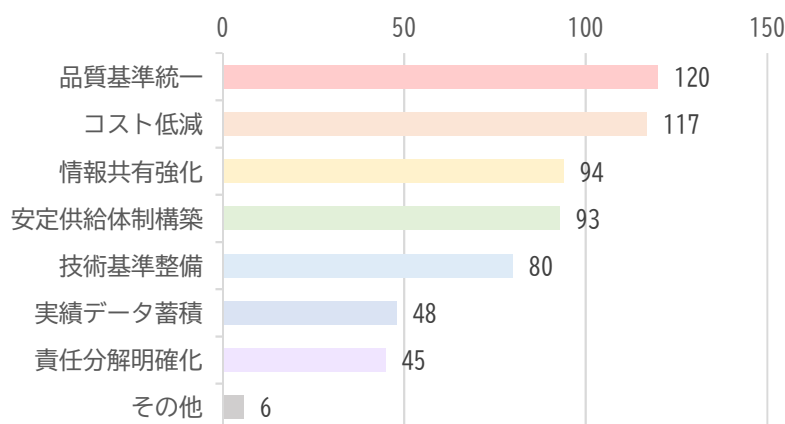
アカウント作成やログインを行わないと、周辺でどのような土砂が出ているのか(場所や数量)すら閲覧できず、**利用のハードルが高い**



目指すのは「現場の負担を減らす」建設サイクル。皆様の声をかたちに

基準の統一やコスト低減に加え、公共仮置き場の整備や費用負担のルール化など、官民が連携した実効性のある仕組みづくりが強く求められています。

建設発生土有効利用推進に必要なこと
(複数回答)



土質改良土の採用判断で重視すること

■公共仮置き場の絶対的必要性

個人や1工事でのタイミング調整は不可能なため、**地域ごとに県が管理するストックヤードを整備することが望ましい**

■費用負担の明確化

搬出側と受入側のどちらが運搬費や積込費を負担するかの**責任分界ルール作り**



現場から寄せられた「生の声」

～有効利用を加速する具体的な解決へのヒント～

■仮置き場（ストックヤード）の不足

- 盛土規制法の厳格化により建設発生土の行き先がなく、現場が非常に困惑している
今後は受入地を官（発注者）側が責任を持って用意すべきである
- 他工事で十分再利用可能な良質の砂礫が出ても、ストックしておく場所がないため、結局遠くの受入地に搬出するしかないのが非常に厳しい

■現場での調整負担とモチベーションの低下

- 他事務所や部局が異なる工事との調整は、工程ズレや土量のブレ、予算の確定遅れなどを招き、**調整実務が煩雑すぎる。結果、建設発生土受入地へ搬出する方が簡単で確実という流れになってしまう**
- 調整を現場に丸投げするのではなく、**全体を統合して差配してくれる専任のコーディネーターを県が配置してほしい**

■部局間（土木×農地）の連携効果

- 土木事務所で発生する土砂を、農林事務所の事業で受け入れるスキームは非常に有効**
- 部局間を繋ぐ常設の調整会議を設けることで、即効性のある有効利用が進む

■システム設計と運用

- 類似システムが多く現場が混乱している。**県としてSSMIに一本化するか、他システムと完全連携してほしい**
- 事前にログイン不要で、発生している土砂が地図上で検索できるような**利便性の高いオープンな仕様にしてほしい**

■技術基準と部位別の適用判定

- どの工事、どの部位（路体、路床、築堤）で土質改良土を使用してよいかのルールが不透明。**発注者側で迷わないよう、適合早見表や指定書を作ってほしい**
- 一度使用した改良土の品質が非常に悪く、粗末な材料だった経験がある。見た目や強度、重金属等の**安全性を証明する『県の認定・公的保証』がなければ現場では使えない**



現場の「やりたいのにできない」を解き明かすクロス分析

～推進したい気持ちはあるものの、現場では「ミスマッチ」や「物理的な限界」が発生～

【実務の壁】 やりたいけれど、手が回らない（県・土木）

実態 : 土木事務所の7割以上が「流用を推進したい」と考えている

ボトルネック : 他工事との工程調整や設計変更の手続きなど、現場担当者の個別調整の負担が大きすぎ、最終的に民間受入地へ頼らざるを得ない過酷な現状がある

【情報の壁】 欲しいけれど、情報が届かない（土木 × 農地）

実態 : 農林部局（ため池や圃場整備など）は、土砂の受け入れポテンシャルが非常に高い状態

ボトルネック : 道路や河川工事から「いつ、どこから、どんな土が出るか」という情報がタイムリーに届かず、絶好の流用機会を逃している

【物理の壁】 運びたいけれど、コストが合わない（遠隔・山間地）

実態 : 下田地区などでは、運搬距離やコストが最大の障壁

ボトルネック : 近くに調整先がなく、細い峠道を何十キロも往復する必要があるため、「流用する方が、普通に搬出するより高くなる」という地域格差が存在



土質改良土の採用を阻む事情

【安全性の懸念】 農地への影響が心配（県・農林）

実態 : 農林部局での改良土の採用率は3割未満（最も低い水準）にとどまる

ボトルネック : セメントや石灰による「隣接農地や水質へのアルカリ影響」を懸念
農家に安全性を証明するための「公的なデータや保証」が不足している

【ルールの硬直化】 自分の首を絞める復旧基準（市町）

実態 : 市町の道路復旧工事で改良土が使えないケースが多発

ボトルネック : 既存ルールや、硬化しすぎて将来の水道管修繕で掘削しにくくなることが壁になっている

【時間の制約】 即日埋戻しに、供給が追いつかない（道路工種）

実態 : 夜間工事や即日施工が多い道路工事では、使いたくても使えない

ボトルネック : 当日中に掘削～埋戻しのタイトな時間の中、近隣に「すぐ調達・受入できる営業プラントがない」という物理的ミスマッチが生じている

今回の調査から、建設リサイクルの推進には現場の努力だけでなく、発注側の柔軟な制度設計や部局の垣根を越えた連携、そして受発注者の密な情報共有が不可欠であることが見えてきました。皆様からいただいた「現場のリアルな声」を真摯に受け止め、より円滑で負担の少ない持続可能な建設サイクルの実現に向けて、官民一体となって全力で取り組んでまいります。

この度はアンケート調査にご協力いただき、また大変貴重なご提言と切実な現場課題をお寄せいただき、誠にありがとうございました。